

## 中高連携を視野に入れた「音楽科教育法」 ならびに「教職実践演習」に関する一考察 —高等学校芸術科音楽の教材分析とその指導法—

関 口 博 子  
(教育学科音楽教育学専攻)

本稿は、中高連携を視野に入れた「音楽科教育法」ならびに「教職実践演習」について、高等学校芸術科音楽の教材分析を行うとともに、その指導法について考察するものである。具体的には、「音楽科教育法」の授業において学生に高等学校(以下、高校とする)での芸術科音楽の履修度を調査し、実際に高校の音楽の授業でどのような曲を習ったのかを明らかにした。その上で、高校の授業で取り上げられることの多かった曲について、なぜ多く取り上げられるのか、その要因について分析した。さらに、「教職実践演習」の授業では、教育実習で学生たちがどのような曲で研究授業を行ったのか調査した。それらのアンケート調査をもとに、高校における芸術科音楽の指導法についての提案を行った。

キーワード：中高連携、「音楽科教育法」、「教職実践演習」、高等学校芸術科音楽、指導法

### 1. はじめに

高等学校芸術科音楽は、学校における普通教育の中で最後に受ける音楽の授業である。高等学校(以下、高校とする)は、義務教育ではなくなり、音楽も芸術科の中で選択する科目の一つとなるため、そこで音楽を選択する生徒は人数も限られてくるであろう。特に、高校1年生の音楽Ⅰは選択できても、2年生の音楽Ⅱや3年生の音楽Ⅲは、選択したくてもそもそも科目がなかった、選択ができなかった、あるいは、音楽Ⅲまで科目があることを大学に入って「音楽科教育法」の授業を受けるまで知らなかった、という学生の声を聞くことが多くあった。

そこで筆者は、実際に本学の発達教育学部教育学科に来る学生のどのくらいの割合の学生が芸術科音楽を高校時代に選択していたのか、また実際に芸術科音楽の授業においてどのような教材を習ったのか、きちんとデータを取って確認する必要があると考え、「高等学校芸術科音楽に関するアンケート」を2022年12月に実施した。本稿では、そのアンケートの結果を分析し、

実際の高校における芸術科音楽の授業の実態に迫るとともに、それを踏まえた指導法について提案したい。

また筆者は、4回生の教育実習でどのような研究授業が行われているのか、そのことを明らかにするために「教職実践演習」の授業で継続的に毎年、アンケート調査を行っている。2015年から17年にかけてのアンケート調査の結果は、拙著(2017)<sup>1)</sup>において詳細な分析を行っている。今回はそのアンケートのその後、コロナ禍を経て、教育実習での研究授業の傾向にどのような変化が現れたのかの分析もあわせて行いたい。

### 2. 「高等学校芸術科音楽」の履修状況について

筆者は、以下の日程で「高等学校芸術科音楽に関するアンケート」を行った。巻末に掲載の<資料>に、実際のアンケートを掲載しているので、アンケートの全体像は、そちらを参照されたい。

アンケート実施日:2022年12月23日(金)

あったため、など)

「音楽科教育法1」		1名	2%
「音楽科教育法3」授業時	無回答	1名	2%

対象学生: 京都女子大学発達教育学部

教育学科学生 58名

このアンケートは2部構成とし、まず前半では、高校時代に芸術科音楽の授業を受けたかどうか、受けた場合に何年生まで受けたかを問うた。後半では、高校の芸術科音楽の教科書に長年掲載され続けている定番の歌唱、器楽、鑑賞のそれぞれの教材について、実際に高校の授業で習ったか、習ったことはないが以前から知っているか、大学で初めて知ったか、まったく知らないか、学生の認知度を問うた。

今回のアンケート調査の結果、芸術科音楽の履修状況は以下の通りとなった。

質問1. あなたは高校は普通科でしたか? 音楽科でしたか?

① 普通科	44名	76%
② 音楽科	10名	17%
③ その他	4名	7%

(具体的に ウィステリア科、理数科、教育みらい科)

まずは、高校が普通科か音楽科か問うた。大学で中学校、高校の音楽の教職免許を取る学生には、一定数、高校が音楽科出身の学生がいる。音楽科では、普通科の芸術科音楽とはカリキュラムが全く異なるため、まずはその確認からスタートした。上のように、全体の2割弱は音楽科出身であることが分かった。

質問2. 音楽科出身以外の人に聞きます。高校の時、芸術科は何を選択しましたか?

① 音楽	42名	88%
② 美術	1名	2%
③ 書道	2名	4%
④ 工芸	1名	2%
⑤ 芸術科がなかった。選択できなかった(例:理系コースで数学の授業が多く		

やはり、中学校、高校の音楽免許を取ろうとする学生たちのため、音楽を選択したという学生が圧倒的に多いことが分かった。

質問3. 2.で①音楽、と答えた方に聞きます。

・音楽の授業はどこまで選択できましたか?

① 高校1年まで(音楽Ⅰのみ)	30名	71%
② 高校2年まで(音楽Ⅱまで)	5名	12%
③ 高校3年まで(音楽Ⅲまで)	7名	17%

・音楽の授業は週何時間ありましたか?

② 週1時間	26名
③ 週2時間	18名
④ 週3時間	1名
⑤ それ以上	0名

やはり音楽を選択できても、高校1年生の音楽Ⅰのみという学生が圧倒的に多い。音楽Ⅲまで高校3年間でしっかりとれたという学生は、芸術科音楽を履修した学生42名中わずか7名である。

3. 高等学校芸術科音楽における教材の認知度調査からの指導法の提案

アンケートの後半では、高校の芸術科音楽の教科書に長く掲載されている定番曲を学生が高校時代の音楽の授業で習ったかどうか、習っていないが以前から知っていたか、まったく知らないか、学生の認知度を問うた。具体的には以下のような4項目を事前に提示し、その番号を答えてもらう、という形式をとった。4項目は以下の通りである。

●以下は、高校教材の認知度についての質問です。全員答えてください。

質問 4. 以下の教材を知っているか、また高校の授業で取り上げられたか、当てはまる番号を( )に記入してください。高校で音楽をとっていない方は、知っているか知らないか(②～④)の観点でのみ、答えてください。

- ①高校の音楽の授業で習った。→習ったことがあれば、そこで初めて知った場合も以前から知っている場合も①としてください。
- ②高校の音楽の授業で習ったことはないが、大学入学前から知っていた。  
→聞いたことがあるだけでなく、中学までに習った、個人的なレッスンで習ったなどはこちらを選択。
- ③大学に入ってから、大学の授業(音楽科教育法、器楽基礎、声楽基礎、ピアノ、声楽など)を通して初めて知った。
- ④この曲については全く知らない。

### 3-1. 歌唱教材について

まずは歌唱教材について、アンケート結果をまとめる。歌唱教材は、以下の曲の認知度を問うた。

- ・翼をください
- ・Caro mio ben
- ・Heidenröslein(野ばら、シューベルト)
- ・Heidenröslein(野ばら、ヴェルナー)
- ・アメージンググレース・帰れソレントへ
- ・この道
- ・北秋の
- ・Ich liebe dich
- ・Voi che sapete
- ・かやの木山の
- ・小さい秋見つけた
- ・O sole mio
- ・An die Musik
- ・平城山

高校には歌唱共通教材はないので、教科書にも様々な曲が掲載され、またその変化も激しい。しかしそうしたなかで上の曲は、長年、高校の歌唱教材の定番曲として、複数の教科書に掲載され続けているものばかりである。これらの曲の中で、芸術科音楽を履修したことがあると答

えた 42 人の学生の半数以上が高校の芸術科音楽の授業で習ったことがあると答えた曲は、以下の 2 曲である。なお、①=高校の授業で習ったと回答した人数である。

- ・翼をください ① 27 名 64 %
- ・Caro mio ben ① 21 名 50 %

《翼をください》の認知度は群を抜いており、②=高校で習ったことはないが、大学入学以前から知っていたという学生も 31 名おり、③=大学に入ってから初めて習った、④=この曲は知らない、との回答はゼロであった。《翼をください》は、複数の芸術科音楽 I の教科書の最初のほうに長年、掲載されている曲であり、音楽 I を履修した学生は、高校入学後、間もなくして習うことになる。それだけでなく、この曲は、小学校、中学校の教科書にも掲載されており、仮に高校で習わなかったとしても、どこかの段階では習ったことがあり、その結果、今回のアンケート調査で全員が以前から知っていると答えたのであろう。

《Caro mio ben》も、複数の芸術科音楽 I の最初のほうに長年掲載され続けている曲であり、初めてのイタリア歌曲として、高校の音楽で習うことになる曲と言えよう。この曲も、②が 20 名、③が 14 名おり、高校の音楽の授業で習わなかったとしても、声楽のレッスンでイタリア歌曲を最初に習うときに歌うことが多い曲であり、認知度は高い。

次に、10 人以上が高校の音楽で習ったことがあると答えた曲は、人数が多い順に以下の曲である。

- ・アメージンググレース ① 19 名 45 %
- ・O sole mio ① 15 名 36 %
- ・Heidenröslein(野ばら、シューベルト) ① 14 名 33 %
- ・帰れソレントへ ① 13 名 30 %
- ・小さい秋見つけた ① 10 名 24 %

《アメージンググレース》が上位に来たのは

少し意外であった。英語の歌であるが、ドラマのエンディングで使われるなどして知名度が上がったというのもあるのであろう。《O sole mio》は、イタリア古典歌曲とはまた違った、イタリア民謡、カンツォーネを代表する曲であり、この曲もテレビCMでサビの部分が使われるなど、知名度が高いと言えよう。

《Heidenröslein》は、音楽Iの教科書のやはり最初のほうに、シューベルトのものだけでなく、ヴェルナーの同曲と見開きで掲載されており、「同じ歌詞で違う作曲家による歌の違いを味わおう」などとめあてが書かれている。したがって本来は、シューベルトとともにヴェルナーの曲もあわせて教え、同じゲーテの詩が作曲家によってこれほど違うということを生徒にわからせることが目的になっていると思われるのであるが、シューベルトのほうしか授業で扱わないケースがあるようである。ちなみにヴェルナーの《Heidenröslein》を高校で習ったと答えた学生は8名であり、シューベルトのほうのみ習った学生が一定数いることが分かった。どういう事情でシューベルトのほうしか授業で扱わないのかは不明であるが、せっきく同じ歌詞の違い作曲家による曲が見開きで掲載されているのであるから、同じ歌詞でも作曲家によってこれほどまでに違うという実感を高校生に持たせる必要があるであろう。それこそが、本題材の目標に沿った授業になるはずである。

《小さい秋見つけた》は、高校の教科書には、作曲者の中田喜直自身による同声二部合唱編曲バージョンが掲載されている。この曲自体は、子どもの歌として幼稚園や小学校でも歌われるが、二部合唱曲となっているところが高校音楽で一段上の内容となっていると言えよう。なお、先にも述べた通り、この歌自体の子どもの歌としての知名度は高いので、高校で習ったことはないが以前から知っていたという②の回答が、32名と非常に多くなっている。二部合唱でこの曲を歌うことで、幼稚園や小学校で小さい頃に歌っていた時とは違うという感覚を高校生に持たせることが、この曲を高校で取り上げるにあたって重要になるであろう。

①が10名以下の曲としては、先ほど述べた通り、ヴェルナーの《Heidenröslein》が8名、《この道》が7名となっており、他は4名以下である。山田耕筰作曲の芸術歌曲としては、《この道》と《からたちの花》がともに高校音楽の教科書に掲載されているが、高校で習ったことがあるというのが、《この道》のほうが7名であるのに対して《からたちの花》は、2名のみであった。その差がどこに起因するのかまでは不明であるが、いずれの曲も、日本歌曲の定番曲であり、声楽のレッスンで歌う機会も多いことから、②または③という回答は多く、それなりの認知度はある。

### 3-2. 器楽教材について

器楽教材としては、リコーダーアンサンブルの定番曲を中心に、以下の曲についての認知度を問うた。

- ・愛のあいさつ                      ・威風堂々
- ・《惑星》より〈木星〉・愛のロマンス(ギター)
- ・シチリアーノ(レスピーギ)      ・島唄(三線)
- ・2つのアルトリコーダーのためのソナタ(ルイエ)                      ・主よ人の望みの喜びよ(バッハ)
- ・六段の調べ(箏曲)                  ・フィンランディア

以上のように、器楽アンサンブル曲は、その多くがもともとその楽器のために作られた曲ではなく、教科書用に編曲された有名曲である。器楽は、歌唱に比べると実施の割合が低いようで、歌唱教材のように半数以上の学生が高校の音楽の授業で習ったと答えた曲はなかった。10人以上が習ったと答えたのは、以下の曲である。人数の多い順に並べる。

・威風堂々	①	17名	40%
・惑星より《木星》	①	14名	33%
・主よ人の望みの喜びよ(バッハ)	①	10名	24%

《威風堂々》が最も多いのは予想通りである。この曲は、中学校の器楽アンサンブルでもよく

取り上げられており、高校でも同様の傾向が認められた。次いで多いのが、ホルストの《惑星》より〈木星〉である。高校の教科書では、一番有名なテーマの部分をソプラノリコーダーとアルトリコーダー2部のリコーダー3部合奏+ピアノ伴奏が書かれた形で掲載されている。ゆったりとしたリズムは、リコーダーアンサンブルに適していると言えよう。

3番目に多かったのが、バッハの《主よ人の望みの喜びよ》であったが、これは少し意外であった。この曲もゆったりとしており、リコーダーアンサンブルには適していると言える。

5人以上が高校の音楽の授業で習ったと答えたのは、人数の多い順に以下の曲である。

・愛のあいさつ	①	9名	21%
・島唄(三線)	①	9名	21%
・シチリアーノ(レスピーギ)	①	18名	19%
・六段の調べ(箏曲)	①	7名	17%
・フィンランディア	①	6名	14%

《愛のあいさつ》は、《威風堂々》と並ぶエルガーの代表作である。この曲も、複数の音楽Iの教科書に掲載されており、ソプラノリコーダーとアルトリコーダーによるリコーダーアンサンブル曲に編曲されている。

《島唄》は、三線で奏でる沖縄の歌であるが、教科書には、三線でのアンサンブルを想定したものと、他の楽器で演奏できるように編曲されたものが掲載されている。おそらくは、三線ではなく、他の楽器を代用として用いての合奏が多いことが予想される。《六段の調べ》は、箏曲合奏曲である。ただ実際には、生徒全員分の箏を所持している高校は少ないことが予想されるので、どのような合奏の仕方をしていたのかは気になるところである。

### 3-3. 鑑賞教材について

鑑賞教材については、以下の曲(一部、形態を指す)について、高校の音楽の授業で習ったことがあるか問うた。

・グレゴリオ聖歌	・ノートルダムミサ曲
・マタイ受難曲(バッハ)	・シャコンヌ(バッハ)
・ブランデンブルク協奏曲	
・オペラ《フィガロの結婚》	・オペラ《魔笛》
・モーツァルト交響曲《ジュピター》	
・モーツァルト《レクイエム》	
・ハイドン交響曲 100番《軍隊》	
・シューベルト《ます》	・ラヴェル《ボレロ》
・ベートーヴェン交響曲第9番	
・ショパン《英雄ポロネーズ》	
・シューマン歌曲集《詩人の恋》	
・ムソルグスキー《禿山の一夜》	
・ラフマニノフ《ヴォカリーズ》	
・ストラヴィンスキー《春の祭典》	
・バーンスタイン《ウエストサイド物語》	
・能《敦盛》	・箏曲《春の海》
・歌舞伎《京鹿の子娘道成寺》	・ヨーデル

鑑賞については、器楽よりは高校の音楽の授業で実施されているようであるが、それでも高校音楽を履修した学生の半数以上が習ったという曲はなく、習った曲はばらける傾向にある。10人以上が高校の音楽の授業で習ったと答えた曲は、多い順に以下の通りである。

・ラヴェル《ボレロ》	①	17名	40%
・モーツァルト交響曲《ジュピター》	①	14名	33%
・ベートーヴェン交響曲第9番	①	13名	30%
・ストラヴィンスキー《春の祭典》	①	12名	29%
・オペラ《フィガロの結婚》	①	10名	24%

鑑賞教材としては、ラヴェルの《ボレロ》が最も多いという結果になった。この曲は、ボレロの独特なリズムと強弱の変化が聴かせどころとなり、単調なようで変化に富んでいる。昭和の頃、冬季オリンピックのスケートペアでこの曲が金メダルを取ったペアに使われ、急速に知

名度を増し、平成以降、教科書で鑑賞の定番曲として掲載されるようになった。2番目が、モーツァルトの交響曲《ジュピター》である。この曲は、モーツァルトの交響曲の中でもっとも有名な曲であり、鑑賞教材として取り上げられる機会が多いというのもうなずける。

3番目に多かったのが、ベートーヴェンの交響曲第9番、いわゆる「第九」として親しまれている合唱付きの交響曲である。この曲は、第4楽章だけでも45分くらいかかるので、全曲聴かせるというよりは、第1楽章から第3楽章までのテーマの部分で第4章に少しだけ出てくる部分を聴かせ、それから第4楽章でそのテーマが打ち消しになる音型等を示したのち、後半の、テノールソロが出てくるところから、シラーの歌詞の解釈も含め、クライマックスの部分で鑑賞する、という方法がよいのではないかと。

そうした中で、4番目にストラヴィンスキー《春の祭典》が入っているのが目を引く。ラヴェルの《ボレロ》も近現代の音楽だが、それ以上にストラヴィンスキーの《春の祭典》は現代音楽であり、なかなかその解釈は難しいが、どのように授業を進めていたのでしょうか。

5番目には、モーツァルトのオペラ《フィガロの結婚》が来ている。《フィガロの結婚》は、モーツァルトのオペラの中で、最も有名なオペラであり、歌唱教材として、その中のアリア〈Voi che sapete〉も教科書に掲載されており、歌唱教材と合わせて授業を進めることができる。ただし、今回のアンケートでは、〈Voi che sapete〉を高校の音楽の授業で習ったと答えたのはわずかに2名だけであり、高校の音楽の授業で鑑賞教材としての《フィガロの結婚》とうまくタイアップできていないことがうかがえた。本来ならばやはり、せっかく同じ教科書に鑑賞教材として《フィガロの結婚》と歌唱教材として〈Voi che sapete〉が掲載されているので、両者を結び付けた授業をすることが望ましいであろう。

続いて、5人以上が高校の音楽の授業で習ったと答えたのは多い順に以下の曲である。

・グレゴリオ聖歌	①	8名	19%
・シューベルト《ます》	①	7名	17%
・ショパン《英雄ポロネーズ》	①	7名	17%
・バーンスタイン《ウエストサイド物語》	①	7名	17%
・ヨーデル	①	7名	17%
・ノートルダムミサ曲	①	6名	14%
・マタイ受難曲(バッハ)	①	6名	14%
・シャコンヌ(バッハ)	①	5名	12%
・ハイドン交響曲 100番《軍隊》	①	5名	12%

ここまでくると、さらにかなりばらけた印象になる。ただ、《グレゴリオ聖歌》という、大学の西洋音楽史の最初に習うような曲が高校の音楽の授業でも取り上げられているケースが少なからずあるということに驚いた。確かに、バッハ以前の中世の音楽に触れる機会は少ないので、学校でそれらを習うというのはいいことであろう。そういう意味では、ノートルダムミサ曲も同様である。

シューベルトの《ます》は、歌唱教材でも教科書に掲載されているので、歌唱教材として歌い、ピアノ五重奏曲として同じ旋律を持つ《ます》を鑑賞する、というのが授業の定番ではないだろうか。

歌唱教材とのタイアップという点では、バーンスタインの《ウエストサイド物語》も同様である。《ウエストサイド物語》の中に出てくる〈Tonight〉は、歌唱教材として高校の教科書に掲載されている。これも、《ウエストサイド物語》を鑑賞し、その際、ストーリーを理解させた上で、歌唱教材として〈Tonight〉を歌い、さらにそのあと改めて《ウエストサイド物語》を鑑賞すれば、より良い授業が展開できるであろう。

ショパンの《英雄ポロネーズ》は、とても有名な曲であり、またピアノを習っている生徒にとってはあこがれの曲でもある。

ヨーデルは、曲名ではなく歌唱の形態であるが、ヨーデルが裏声を使ったアルプス地方の独特の歌であることは比較的知られているので、

民族音楽の一つとして、ヨーデルを観賞で扱うことは意義があるであろう。

バッハの《マタイ受難曲》は、「人類の最高傑作」と言われ、バッハの代表作でもあるので高校の鑑賞教材になっているが、いかんせん長大な曲であり、全部通すと3時間近くになるので、その中の有名な曲だけ取り上げることになるであろう。シャコンヌもバッハ作品であるが、こちらは小品で扱いやすい。ハイドンの《軍隊》は、ハイドンの代表作の一つである。

他の鑑賞教材は、高校で習ったことがあるというのは4人以下となっている。高校の音楽には共通教材がないことは先に述べたが、中学校においても現在、鑑賞には共通教材は設定されていない。しかし、平成10年の学習指導要領の改訂まで、中学校には鑑賞の共通教材が設定されていたため、例えば、シューベルトの《魔王》やヴィヴァルディの《四季》より〈春〉など、鑑賞の定番曲として教科書に掲載され続けている曲があり、授業でもそういったかつての共通教材が取り上げられる傾向が強い。その点、高校は、もともと共通教材がないため、定番曲として教科書に載り続けている曲であっても、教員の嗜好などにより、取り上げられる曲が学校によってかなり異なっていると言ってよいであろう。

#### 4. 「教職実践演習」におけるアンケート調査の結果からみる教育実習における研究授業の実際

先述の通り筆者は、「教職実践演習」の授業において、毎年、教育実習での研究授業についてのアンケート調査を実施している。コロナ禍以前の2017年の調査については、前述の通り拙著(2017)においてその結果をまとめている。今回は、2022年度のアンケート調査の結果をまとめ、前回の拙著でまとめた2017年の調査時との比較検討を行い、コロナ禍以前とコロナ禍を経た現在とで差があるのかどうか、あるいはすでにコロナ禍から3年を経た現在では、コロナ禍以前に戻ったのかどうか、検証したい。

まずは、今年のアンケート結果をまとめたい。

京都女子大学の「教職実践演習」は現在、オムニバス授業となっており、筆者は、教科教育の3回の授業を担当している。アンケートは、筆者担当の初回の授業において毎年取っている。今年は、24名から回答を得たが、筆者担当の初回授業は9月下旬であり、この時期は副免で小学校免許を取得する予定の学生の多くが小学校の教育実習に行っており、「教職実践演習」の履修者全員からアンケートが取れているわけではない。また、その時点ではまだ教育実習に行く前という学生もおり、研究授業について回答できない学生も含まれている。

まず、教育実習に中学校と高等学校のどちらに行ったか(または行くか)の問いに対しては、以下のような回答が得られた。

●中学校…21名                      ●高等学校…3名

このように圧倒的に中学校に行った学生が多いのであるが、それには理由がある。本学では、中学校と高等学校の両方の教員免許を取得しようという学生は、原則として中学校で教育実習をすることになっている。したがって、高校に実習に行く学生は、高校の免許しかとらないか、中高一貫の私立学校などに限られるのである。

次の質問は、教育実習で行った研究授業の領域についてである。

●歌唱…14名                      ●器楽…3名  
●創作…2名                      ●鑑賞…8名

なお、複数の領域にまたがる研究授業を行った場合には、両方に○をつけるように指示したため、回答者の数より合計の人数は多くなっている。ちなみに、2017年の調査時には、以下の通りであった。

(2017年調査時)

●歌唱…28名                      ●器楽…3名  
●創作…3名                      ●鑑賞…12名

2017年当時のほうが「教職実践演習」の履修

者数が多いので、人数は多くなっているが、全体的な傾向とするとあまり相違がないように見受けられる。しかしよく見ると、鑑賞の割合が、2017年より2022年のほうが高くなっていることが見て取れるであろう。今回は、誌面の都合上2020年のコロナ禍初年度や昨年のアンケート結果は掲載しないが、2019年までのコロナ禍以前では、歌唱が圧倒的に多かったのに対して、2020年のコロナ禍初年度では歌唱が激減し、ほとんど鑑賞になった。昨年度はいくらか持ち直して歌唱が増えたものの、まだ鑑賞のほうが多かったが、コロナ禍3年目にしてようやく、コロナ禍以前の状態に近づいたと言えよう。器楽と創作が少ないのはコロナ禍以前からであり、特にリコーダーは、コロナ禍ではやりたくても全くできなかったという学生からの回答が、2020年と2021年のアンケートに記入されているケースが複数あった。

ちなみに、高校に実習に行った学生たちの研究授業で取り上げた曲は、《O sole mio》《Caro mio ben》となっており、高校の芸術科音楽の定番曲であった。

中学校に教育実習に行った学生たちの研究授業で取り上げた曲の代表的なものは、以下の通りである。

歌唱:浜辺の歌、夏の思い出、花、花の街、  
旅立ちの日に、主人は冷たい土の中に  
鑑賞:《四季》より〈春〉、魔王、小フーガ短調、  
ベートーヴェン交響曲第5番、  
フィガロの結婚

歌唱、鑑賞ともに昭和の頃から教科書に掲載され続けていた定番曲ばかりである。《浜辺の歌》《夏の思い出》《花》《花の街》は中学校の歌唱共通教材であり、《旅立ちの日に》は、中学校では卒業式の定番ソングとなっている。《主人は冷たい土の中に》は、外国曲であるため歌唱共通教材にはなっていないが、昭和のころより教科書に掲載され続けている。

鑑賞教材では、ヴィヴァルディの《四季》より〈春〉や《魔王》は、毎年複数の学生が教育

実習の研究授業で行ったと答えており、実習に行く時期にちょうどカリキュラム的にそれらの教材を扱う時期に当たっているということとともに、〈春〉も《魔王》も物語性があり、指導経験の浅い教育実習生でも授業が行いやすいという側面もあるであろう。その他、《小フーガ短調》やベートーヴェンの交響曲第5番、《フィガロの結婚》なども、定番として教科書に掲載され続けている鑑賞教材であり、実習の研究授業ではやはり、定番と言われている曲を扱うことが多いことが分かった。

他に、「教職実践演習」での教育実習についてのアンケートでは、研究授業までに何回程度授業をしたかを問うた。それが、以下の通りである。

問: 研究授業までに何回程度、授業を担当しましたか?

5回以下… 7名	6～10回…5名
11～20回…5名	21回以上…4名

これは毎年、本当に差が大きい。今年については、最低が1回、最高が30回となっている。これにはさまざま学校の事情があり仕方ない面もある。担当させてもらった授業回数の少ない学生は、国立大学附属に行った学生などで、他に実習生が多くおり、少ない授業を実習生同士で分け合いながら進めなければならないというケースもある。研究授業の前に1回だけ別のクラスで同じ内容の授業をさせてもらえた、という学生はまさにそのケースであった。逆に多い学生は、最初の2日くらいだけ見学で、それ以降は1週目から毎日、何時間か授業を担当したという学生もいた。

##### 5. 中高連携を視野に入れた高等学校芸術科音楽の指導法の提案

これまでの記述で、「音楽科教育法」の授業と「教職実践演習」の授業におけるアンケート結果の分析を行い、高校の芸術科音楽で学生がどのような曲を習ってきたのか、その実態を明

らかにし、また実際に教育実習の研究授業でどのような曲が取り上げられてきたのかも明らかになった。最後に、それらを踏まえて中高連携を視野に入れた高等学校芸術科音楽の指導法の提案を行いたい。

まず、中学校と高校の音楽教科書を比較してみると、高校の音楽教科書に意外に中学校の教科書に掲載されているものと同一曲が多く掲載されていることに気付く。実は、中学校の歌唱共通教材の《浜辺の歌》《夏の思い出》《花》《花の街》などは、高校の教科書にも掲載されている。中学校の歌唱共通教材のような、中学校で教えらるる曲を高校で再度教える場合には、中学校とその指導において差をつけなければならないであろう。例えば、より深く、それらの曲の歴史的背景について学んだり、表現を一層高めるような指導が必要となる。そう考えると、中学校と同じ曲を高校で教えるというのは、よほど気を付けないとその差が見いだせないことになりかねず、かえって難しいと言える。

中学校の教科書に掲載されていて高校の教科書にも掲載されている曲でも、その差をつけやすい曲もある。例えば、《サンタルチア》などの外国曲である。《サンタルチア》は、昭和時代には中学校の歌唱共通教材に指定されていたこともあり、歌唱共通教材に指定された最後の外国曲である。現在は、歌唱共通教材からは外れているが、定番曲として中学校の教科書には掲載され続けている。一方、高校の音楽教科書にも掲載されているが、この曲は通常、中学校では日本語の歌詞で歌うが、高校では、日本語の歌詞の前に原語(イタリア語)の歌詞が掲載されており、中学校で日本語の歌詞で歌ったものを高校では原語で歌う、と変化をつけることで中学校より一段上の授業を行うことができる。このような例は、《帰れソレントへ》などでもそうである。

器楽教材でも、鑑賞教材でも、中学校の教科書に掲載されているのと同じ曲を扱う場合には、いかに中学校と差をつけるか、そこに気を配らなければならないであろう。

## 6. おわりに

本稿では、先述の通り、「音楽科教育法」の授業と「教職実践演習」の授業におけるアンケート結果の分析を行い、高等学校芸術科音楽で学生がどのような曲を習ってきたのか、その実態を明らかにし、また実際に教育実習の研究授業でどのような曲が取り上げられてきたのかも示した。最後に、それを踏まえて中高連携を視野に入れた高等学校芸術科音楽の指導法の提案も行った。しかしまだ、今回のアンケート調査の分析結果だけでは高等学校芸術科音楽の実態を明らかにするのは不十分である。今後さらに、調査を続けていきたい。

## 注

- 1) 京都女子大学発達教育学部教育学科音楽教育学専攻編『中学校・高等学校教員養成課程における音楽科教育の理論と実践』三恵社、2017年、31-34頁。

## 文献

- 京都女子大学発達教育学部教育学科音楽教育学専攻編 2017 『中学校・高等学校教員養成課程における音楽科教育の理論と実践』三恵社  
『高校生の音楽1』 2022 教育芸術社  
『高校生の音楽2』 2017 教育芸術社  
『Joy of Music 音楽Ⅲ』 2018 教育芸術社  
『音楽Ⅰ Tutti』 2022 教育出版社  
『音楽Ⅱ Tutti』 2022 教育出版社  
『音楽Ⅲ 改訂版』 2010 教育出版社  
文部科学省 2017 「中学校学習指導要領」  
文部科学省 2018 「高等学校学習指導要領」

## <資料>

### 高等学校芸術科音楽に関するアンケート

専攻

回生

●当てはまる番号に○をつけてください。

1. あなたは高校は普通科でしたか？音楽科でしたか？

- ① 普通科                      ② 音楽科  
 ③ その他（具体的に                      ）
2. 音楽科出身以外の人に聞きます。高校の時、芸術科は何を選択しましたか？
- ① 音楽                      ② 美術  
 ② 書道                      ④ 工芸  
 ⑤ 芸術科がなかった。選択できなかった（例：理系コースで数学の授業が多くあったため、など）
3. 2.で① 音楽、と答えた方に聞きます。  
 ・音楽の授業はどこまで選択できましたか？
- ① 高校1年まで(音楽Ⅰのみ)  
 ② 高校2年まで(音楽Ⅱまで)  
 ③ 高校3年まで(音楽Ⅲまで)  
 ・音楽の授業は週何時間ありましたか？
- ① 週1時間                      ② 週2時間  
 ② 週3時間                      ④ それ以上
- 以下は、高校教材の認知度についての質問です。全員答えてください。
4. 以下の教材を知っているか、また高校の授業で取り上げられたか、当てはまる番号を(      )に記入してください。高校で音楽をとっていない方は、知っているか知らないか(②～④)の観点でのみ、答えてください。
- ① 高校の音楽の授業で習った。  
 →習ったことがあれば、そこで初めて知った場合も以前から知っている場合も①としてください。
- ② 高校の音楽の授業で習ったことはないが、大学入学前から知っていた。  
 →聞いたことがあるだけでなく、中学までに習った、個人的なレッスンで習ったなどはこちらを選択。
- ③ 大学に入ってから、大学の授業(音楽科教育法、器楽基礎、声楽基礎、ピアノ、声楽など他)を通して初めて知った。
- ④ この曲については全く知らない。
- (歌唱教材)
- ・翼をください (                      )  
 ・小さい秋見つけた (                      )  
 ・Caro mio ben (                      )  
 ・O sole mio (                      )  
 ・Heidenröslein(野ばら、シューベルト) (                      )  
 ・Heidenröslein(野ばら、ヴェルナー) (                      )  
 ・アメージンググレース(                      )  
 ・帰れソレントへ (                      )  
 ・この道 (                      )  
 ・からたちの花 (                      )  
 ・北秋の (                      )  
 ・初恋 (                      )  
 ・Ich liebe dich (                      )  
 ・An die Musik (                      )  
 ・Voi che sapete (                      )  
 ・O mio babbino caro (                      )  
 ・平城山 (                      )  
 ・かやの木山の (                      )  
 ・その他→上記以外で高校の音楽の授業で歌ったことがある曲を挙げてください。  
 (                      )
- (器楽教材)
- ・愛のあいさつ (                      )  
 ・威風堂々 (                      )  
 ・《惑星》より〈木星〉 (                      )  
 ・シチリアーノ(レスピーギ) (                      )  
 ・二つのリコーダーのためのソナタ(ルイエ) (                      )  
 ・島唄(三線) (                      )  
 ・主よ人の望みの喜びよ(バッハ) (                      )  
 ・六段の調べ(箏曲) (                      )  
 ・愛のロマンス(ギター) (                      )  
 ・フィンランディア (                      )  
 ・その他→上記以外で高校の音楽の授業で合奏したことがある曲を挙げてください。  
 (                      )

(鑑賞教材)

- ・グレゴリオ聖歌 ( )
- ・ノートルダムミサ曲 ( )
- ・マタイ受難曲(バッハ) ( )
- ・ブランデンブルク協奏曲 ( )
- ・シャコンヌ(バッハ) ( )
- ・オペラ《フィガロの結婚》 ( )
- ・モーツァルト・レクイエム ( )
- ・ハイドン交響曲 100 番《軍隊》 ( )
- ・モーツァルト交響曲《ジュピター》( )
- ・シューベルト《ます》 ( )
- ・ベートーヴェン交響曲第 9 番 ( )
- ・ショパン《英雄ポロネーズ》 ( )
- ・シューマン・歌曲集《詩人の恋》 ( )
- ・ムソルグスキー交響詩《禿山の一夜》  
( )
- ・ラフマニノフ《ヴォカリーズ》 ( )
- ・ストラヴィンスキー《春の祭典》 ( )
- ・バーンスタイン《ウエストサイド物語》  
( )
- ・ラヴェル《ボレロ》 ( )
- ・能《敦盛》 ( )
- ・箏曲《春の海》 ( )
- ・歌舞伎《京鹿の子娘道成寺》 ( )
- ・ヨーデル ( )
- ・その他→上記以外で高校の音楽の授業で鑑賞  
したことがある曲を挙げてください。  
( )

以上です。ご協力ありがとうございました。